福翁自傳（九）

福澤 諭吉 日述
矢野由次郎 速記

大阪修業（一）

兄の申すのとには私も連らふみとが出來ず大阪に足を止めまして緒方先生の塾に入門したのは安政二年卯歳の三月でした其前長崎に居る時には勿論蘭學の稽古をしたので其稽古をした所は楢林と云ふ和蘭通詞の家、同じく楢林と云ふ醫者の家、それから石川櫻所と云ふ蘭法醫師、此人は長崎に開業して居て立派な門戸を張て居る大家であるから中々入門するとは出來ないソコで其處の玄關に行て請合所の人なぞに習つて居たので預う云ふやうに彼方此方にちよい〳〵と教へて奥れるやうな人があれば其處へ行く、何處の何某に便り誰の門人になつてミッチリ蘭學を讀なと云ふみとはないのでソコで大阪に來て緒方に入門したのは是れが本當に蘭學修業の始まり、始めて規則正しく書物を教へて貰ひました、其時にも私は學業の進歩が隨分遠くて塾中には大勢書生のあるけれども其中ではマア出來の宜い方であつたと思ふソコで安政二年も終り三年の春になると新春早々茲に大なる不仕合な事が起つて來たと申すは大阪の食屋敷に勤居中の兄が僕麻質斯に罹り病症が甚だ輕くないトヨ〳〵手足も叶はぬと云ふ程になつて追々全快するが如く全快せざるが如くして居る間に右の手は使ふみとが出來ずに左の手に筆を持て書くと云ふやうな容體ソレと同時に其讀の二月頃であつたが緒方の塾の同窓私の先輩で豫て世話になつて居た加州の岸直輔と云ふ人が腐蝕扶斯に罹つて中々の難症ソコデ私は平生の恩人だからコンナ時に看病しなければならぬ又加州の藩生鈴木儀六と云ふ者があつて是れも岸と同國の縁で私と鈴木と兩人晝夜看病して凡そ三週間も手を濡したけれども如何しても驚症でとう〳〵助からぬ一體此人は加賀人で宗旨は眞宗だから火葬にして其遺骨を親元に送て遣らうと兩人相談の上遺骸を大阪の千日の火葬場に持て行て燒て骨を本國に送り先づ事は濟んだ所が私が千日から歸て三四日經つとヒョイと煩ひ付た容體がドウも只の風邪でない熱があり氣分が甚だ悪いソコデ私の同窓生は皆醫者だから難かに見て貰た所が是れは腐蝕扶斯だ岸の熱病が傳染したのだと云て騒る間に其事が先生に聞えて其時私は靈場の倉屋敷の長屋に寢て居た、所が先生が見舞に見えまして倉屋腐蝕扶斯に違ひない本當に療治しなければ是れは馬鹿になるぞと病氣であると云ふ夫れから私は其時に今に忘れぬ事のあると云ふのは緒方先生の深切口方藥は其病氣を能く診て遣る、診て遣るけれども方藥が自分で處方するみとは出來ない何分にも遠ふて仕舞ふ此の藥彼の藥と遷ふて後になつて爾うでもなかつたと云て又藥の[illegible]滅をすると云ふやうな譯けで仕舞には何の[illegible]治をしたか譯けが分らぬやうになると云ふのは人情の免れぬ事であるから病は診て遣るが執匙は外の醫者に頼む、其つもりにして居れと云て先生の朋友梶木町の内藤數馬と云ふ醫者に執匙を託し内藤の家から藥を貰て先生は只毎日來て容體を診て病中の攝生法を指圖するだけであつたマア今日の學校とか學塾とか云ふものは人數も多く迚も手に及ばない事で其師弟の間は自から公なものになつて居る、けれども昔の學塾の師弟は正しく親子の通り緒方先生が私の病を見てどうも藥を授るに迷ふと云ふのは自分の家の子供を療治して遣るに迷ふと同じ事で其扱は實子と少しも違はない有樣であつた後世段々に世が開けて進んで來たならばみんな事はなくなつて仕舞ませう私が緒方の塾に居た時の心地は今の日本國中の塾生に較べて見て大變に違ふ私は其實緒方の家の者のやうに思ひ又思はずに居られませんソレカラ唯今申す通り實父同樣の緒方先生が立會で内藤數馬先生の執匙で有らん限りの療治をして貰ひましたが私の病氣も中々輕くない頃ひ付て四五日目から人事不省丸を一週間ばかりは何も知らない程の容體でしたが幸にして全快に及び衰弱はして居ましたれども腐蝕扶斯平生身體の强壯な其爲めでせう快復は中々早いモウ四月になつたら無に出て歩くやうになり其間に兄は僕麻質斯の有らん限りの療治をして貰ひましたが私の病氣は居られませんソレカラ唯今申す通り實父同樣の緒方先生が立會で内藤數馬先生の執匙で